

曹洞宗 蟠龍山 護国院 芳全寺

芳 ほろれん 蓮

2025 年初夏号

いのちのある限り 好んで愛語すべし

令和 7 年初夏

No. 5



お盆とお施餓鬼について

・知っているようで知らないお盆の由来

日本の夏といえばお盆！お盆といえば実家に帰って家族に会ったり、レジャーに出かけたりと、私たちにとって馴染み深い風習です。実は1300年も続く長い長い歴史があります。

・施餓鬼会（せがき・おせがき）の始まり

施餓鬼会の始まりは、お釈迦さまの弟子阿難尊者あなんそんじやさまが修行していると「エンク」という鬼が現れ、「お前は三日のうちに死ぬ、そして餓鬼に生まれ変わるだろう」と言われ、阿難尊者さまは、お釈迦さまに教え請いにきました。するとお釈迦さまは、「阿難よ、おそれることはない、私の言うとおりに供養をなさい。そして多くの者へ食べ物を施しなさい」と仰せになりました。阿難尊者さまは、教えのとおり、施餓鬼棚をもうけ、山海の食物を供え、多くの僧侶に供養していただきました。そして、阿難尊者さまは救われ、お釈迦さまの弟子の中で最も長生きをしたことがはじまりとなりました。

施餓鬼会の折、曹洞宗では、「甘露門」というお経を読経をいたします。甘露とは、インドでは神々の飲み物で、これを飲むと不老不死となるという功德をもったものとされていました。その味が蜜のように甘いといわれたことから甘露といい、天の酒・天からの

降りてくる甘い露とも考えられたこともあります。この観念は仏教にも取り入れられ、苦悩をいやし、長寿ならしめるとの伝えがあります。

他の生命を食べて生きていると思えば、食べることの重要さに気づかされます。「いただきます」「ごちそうさま」という感謝の言葉が自然にでてくるはず。これが施餓鬼会の心の表れなのです。

この経典を通じ阿難尊者さまを偲び、自らの持つ、貪りの心を反省し、すべての亡き人に感謝の心を捧げたいものです。

・なぜお盆に棚飾りを作るのか

夏に精霊棚を飾る風習は元々、祖先に夏の恵みを感謝し、秋の実りを願うという民俗信仰でした。

その後、一般社会に仏教が浸透するにつれ、先祖供養と合わさって、盂蘭盆会と共に行われるようになりました。

その時代時代の人々が先祖に願い、子孫に託した想いが紡がれて、今、皆様のご自宅の精霊棚につながっています。

・後世に伝えよう

お盆は是非おじいちゃん・おばあちゃんからお子さん・お孫さんにお家に伝わる精霊棚の飾り方をお伝えされてはいかがでしょうか？

※芳全寺の施餓鬼会（お施餓鬼）は毎年8/7に行われます。ぜひお参り下さい。

お盆の棚飾りの一般的な例はこちらから→→



誰かに伝えたくなる

仏教の言葉

「挨拶 あいさつ」

幼い頃から、「きちんと挨拶をしましょう」と言い聞かされてきた人が多いと思います。実は、この「挨拶」という言葉も禅語のひとつです。

もともと「挨拶」という禅語は、師匠と弟子の、教えを伝え、学ぶ真剣なやりとりから生まれました。「挨拶」は推す、「拶」は迫るという意味をもちます。つまり「挨拶」とは、相手の心の内にある真意を推し量り、真理に迫っていく行為なのです。

考えてみると、この地球上で、挨拶の言葉を持たない民族はいません。そして挨拶には必ず、挨拶の「言葉」と「型」が存在します。

中東では握手、欧米ではハグ、タイやインドでは合掌、そして日本のお辞儀など。それにしても、なぜこのような挨拶の「型」が生まれたのでしょうか。それは、お互いを敬い、争いを起こさないためです。

脳の発達によって、言葉を話し、道具を発達させ、複雑な感情を持つようになった人間は、「好き・愛しい・美しい」などの他者に対するポジティブな感情を持つと同時に、「欲・怒り・嫉妬・憎しみ」などのネガティブな感情も持つようになりました。

そして、この地球上で、武器を持って殺し合いをする唯一の生き物となりました。そこで大切になるのが、挨拶の「型」です。

中東では馬に乗り、手綱を持たない方の手を握り合って挨拶をする。騎馬民族由来の「シェクハンド」が生まれました。お互いに何も持たず素手であるということを証明するための「型」です。ハグも、お互いが抱き合うことで、武器を持っていないことを確認し合う「型」です。また、合掌は右手があなた、左手が自分という意味をもち、あなたの喜び、悲しみ、苦しみを私も感じます。という友好の情を表しています。

そんな中、日本人のお辞儀はさらに特別な意味を持っています。両手を身体の側面にピタリとつけ、相手と目を合わせることなく、無防備に頭を相手に差し出します。それが「お辞儀」と呼ばれる日本の挨拶の「型」なのです。人のこころは毎日変わります。「おはよう」「こんにちは」と、自分から挨拶をすることで、今、相手がどういう状態なのか推し量り、内側の本質に迫ることができます。

軽く会釈をするだけで、人と人との壁をなくし、より深く相手との関係を築くことにつながるのです。「気持ちの良い挨拶」を心がけたいものです。

文 徒弟玲音



時代に寄り添う お寺の在り方 (前編)



芳全寺徒弟 荒木玲音 32歳
 東北大学卒・玉川大学卒
 一般企業に勤務後、
 令和3年大本山永平寺別院
 長谷寺にて安居
 仏教を分かりやすく伝えるため勉強中



貞昌院ホームページ

今回の対談は横浜市港南区にある天神山貞昌院住職である亀野哲也師です。宗門の発展に大きく貢献され続け、またご自坊での様々な活動を通して檀信徒の布教教化に邁進されている方です。

お寺を永續させていくための取り組みや僧侶として大切な心構えを聞いていきます。

お寺を永續させていくための

取り組みや僧侶として大切な心構えを聞いていきます。

たせることは当然だと思っ
 ます。「経営」という言葉は仏
 教の言葉であることは知って
 いますか？

玲音 はい、聞いたことがあります。

お寺を経営するとは

徒弟玲音 (以下玲音) 本日はよろしくお願い致します。貞昌院様はホームページが充実していますよね。特に印象的なのが、情報公開の透明性です。「こんなことまで公開しているのか」と正直ビックリしました。

玲音 どういったら永續させられるのか、という視点を大切に運営していかねばならないということですね。そのために檀信徒の方々に情報をオープンにしていると。活動を拝見すると宗教法人としてのCSR※も

亀野哲也師 (以下亀野) 護持会の決算報告も載せていますからね。お寺の運営に透明性を持

と宗教法人としてのCSR※も

重要視されているように感じます。情報公開だけでなく、檀信徒の方々、環境保護のための諸活動、大変参考になります。

※CSR…企業が市民や地域、社会の顕在的・潜在的な要請に応え、より高次の社会貢献や配慮、情報公開や対話を自主的に行うべきであるという考えのこと。

亀野 ありがとうございます。モノレールは乗られましたか？高台側の墓地は勾配が急でした



墓参用モノレール「まいれ〜る」

ので、墓地を整備する際にモノレールを導入する構想をしていました。「安心してお墓参りができます」という声を頂けています。一つモノレールは例ですが、相手のことを思って考えて行動すること、その積み重ねが大切ではないでしょうか。

玲音 帰りにぜひ乗らせてください。※実際に体験して亀野住職に敷地を案内頂きました。

墓地の利用案内も規則も公開し、明確にされていますよね。私はまだ整理ができていないので課題に感じています。またお墓の話が出たので質問なのですが、檀信徒の方々も将来世代交代されていく中で、墓じまいの話の聞いたりします。この時代の流れをどのようにお考えでしょうか？

柔軟に変化すること



亀野哲也（かめの てつや）60歳
天神山貞昌院 住職
早稲田大学理工学部を卒業後、都庁にて建設、施設計画の業務に従事。大本山總持寺にて安居した後、SOTO 禅インターナショナル事務局長、宗務庁級階査定委員長座長、宗務庁広報委員等歴任。平成24年より貞昌院住職となる。

亀野 まず求められることが変わってきたのだと感じます。家の墓が負担に感じる方がいるから墓じまいの話が出るわけで、そのような方によくお話を聞くとお墓に対するニーズが変わってきたと感じます。ある人は夫婦だけで入りたい、ある人は永代供養がいい、ある人は納骨墓がいい・・・というようにです。そもそも今のように「○○家の墓」と書かれた墓ができたのは明治以降に建立されたものがほとんどだと思えますので、せいぜい百数十年の歴史ですよね。その時、その時のニーズに合わ

せて作っていかばいいのではないかと考えています。あくまでも長期的な目線でお寺を永續させるために必要なことだと私は考えています。今はその過渡期であると感じています。

玲音 全ては永續させるためのお考えということですね、大変勉強になります、ありがとうございます。さて次の話ですが、

次号につづく・・・



環境保全のための太陽光発電や廃油回収事業にも取り組まれている

写真提供：貞昌院

道元禅師って どんな人？



4 悟りと帰国

- # 曹洞宗を開いたお坊さん
こうそじょうようだいし
- # 高祖承陽大師と尊称されている
- # 京都を離れ福井へ
- # 永平寺を建立し、修行を確立

前回までのお話

悟りを得るという目的を持っての坐禅ではなく、坐禅そのものが悟りの姿であるという『修証一如（しゅしょういちにょ）』の教えを示された道元禅師。京都に興聖寺を開き、布教と弟

- 子育成に努めていましたが、その教えが広まるにつれて、旧仏教勢力、特に比叡山延暦寺からの圧力が強くかかるようになってきました。

越前の地へ

京都での活動が困難だと考えた道元禅師は、師である如浄禅師から「世俗の権力に近づかず、深い山の中で、少ない人数でも良いから本当の弟子を育て、真実の仏の教えを絶やさぬようにしなさい」という言葉を深く刻んでおり、43歳の時に弟子とともに越前（現在の福井県）に

- 移ることを決意されました。その当時地頭であつたのが波多野義重（はたのよししげ）公であり、彼は道元禅師の教えに心酔しており、禅師が修行に専念できる道場を提供したいと願っていたそうです。

永平寺の建立

越前に入った道元禅師は、まず吉峰寺という古寺に仮寓された後、寛元2年、波多野義重公の寄進により、傘松峰（さんしょうほう）に新たな寺院を建立し、大仏寺と名付けます。そして1246年6月15日、47歳のときに大仏寺は改名され、吉祥山永平寺と呼ばれるようになり今日に至っています。この「永平」という名は、「永久の平和」を意味し、仏法がもたらす永遠の安らぎと幸福を象徴しています。道元禅師はここで「いぎそくぶつぼう威儀即仏法、さほうこれしゅうし作法是宗旨」

- （立ち居振る舞いそのものが仏法であり、作法こそが教えの根本である）という教えを徹底し、日常のあらゆる行いを修行と捉える規律を確立されました。この永平寺の建立は、道元禅師が目指す純粋な禅の修行共同体を具現化し、その法灯を後世に伝えるための確固たる基盤を築くという、極めて重要な意味を持っていました。自分の地位に安住せず、厳しい真実の仏法を保ち、修行僧と民衆を教化した道元禅師ですが、晩年病におかされ・・・



一生真似をしていたら 真似が本物になる



「二日真似をして、それで済んでしまったら一日の真似。二日真似してあと真似をしなかったら二日のマネ。ところが一生真似をしていたらそれは本物になる」

この言葉は平成時代にご活躍された、福井県にある曹洞宗大本山永平寺の七十八世貫主宮崎奕保えきほ禅師（右写真）のお言葉です。

この言葉の真意は修行者は一生仏の真似をして生き、自らに仏を体現していかなければならないという意味で、修行者なら誰しもが腑に落ちる言葉です。

さて、私はこの言葉を聞くと、こんな昔話を思い出します。

あるところにスリや賽銭泥棒など小さな悪事を生業にする小悪党がいました。小悪党はある日、と

ある商家の本店に黄金で出来たそろばんがある事を聞きました。

「俺も今までせこい悪事ばかり重ねて、人に迷惑ばかりかけてきた。金で出来たそろばんとやらがあれば一生食うに困らない。よし、金のそろばんを盗んで悪事からきっぱり足を洗おうじゃねえか！」

しかし、金のそろばんのある部屋は厳重に管理され、部屋に入れるのは信用されている人だけのこと。

「さて、どうやって金のそろばんを盗もうか。そうだ！店で一生懸命働いて、俺を信用してもらい、金のそろばんの部屋に入れるようになってから盗んでやろう！」

それから、小悪党は使用人とし

て店に潜り込み、主人を信用させるためにとことん善人の真似をして働き始めました。

来る日も来る日も誰よりも朝早く起きて道を掃除し、いつでも笑顔で人と接し、優しい言葉をかけ、困っている人がいれば助けました。それもこれも目的はただひとつ、金のそろばんを盗むためでありました。

「ちくしょー。眠いなあ。まだ朝の4時半じゃねえか。掃除面倒くせえなあ。しかしこれも信用させるため」「こいつほんと嫌なやつだなあ。なんでこんなやろうに笑顔で優しくしなくちゃならねえんだ。しかし、これも金のそろばんを盗むため。仕方ない」

そうやって、小悪党は何年も根気よく善人のふりを続けたお陰で、すっかり主人からの信用を得て、店の番頭に上り詰めたのです。

さて、番頭になれば金のそろばんの部屋にも出入りが許され、盗むならいい頃合いでした。しかし、小悪党は金のそろばんを盗もうとは決して思いませんでした。なぜなら、小悪党は根気よく善人の真似を続けたことで、立派な善人になっていたからでした。

これは、人を騙すために始めた善人の真似という行為が、意に反して小悪党の心を正し、いつのまにか本物の善人になってしまったというお話です。

私たちも善人や仏の真似を続けて、本物の善人や仏になっていきましょう。それが人として生まれきた印のはずです。





② 栃木県曹洞宗青年会総会



③ 境内外灯新設



① 昌泉寺 晋山式

令和七年上半年期の活動

昌泉寺 晋山式

令和七年三月二八日・二九日、茂木町千本にある昌泉寺におきまして晋山式（新たに任命された住職の就任式）が厳修され、徒弟の玲音が殿行の配役で随喜させて頂きました。一世一代の大行持に随喜させて頂き感謝の思いでいっぱいです。

栃木県曹洞宗青年会総会

令和七年四月八日、栃木県曹洞宗青年会総会が開催され、徒弟の玲音が今年度も引き続き執行部員（会計補佐）ならびに地区理事に補任されました。

境内外灯新設

日照時間が短くなる特に冬場において、本堂西側の墓地の通り沿いが暗く不便を感じることがありましたため、外灯を二機新設致しました。明るくなりましただけで、お参りの際にもご安心頂けると思います。

社会貢献活動

当山では社会貢献活動としてボランティア活動や非営利団体への支援を行っています。

・おてらおやつクラブ

お寺にお供えされるさまざまな「おそなえ」を、仏さまからの「おさがり」として頂戴し、子どもをサポートする支援団体の協力の下、さまざまな事情で困りごとを抱えるひとり親家庭へ「おすそわけ」する活動

・公益社団法人ハタチ基金

東日本大震災で被災した子どもたちへの教育支援活動

・認定NPO法人フローレンス

病児保育や障害児保育、特別養子縁組への支援活動

・シャンティ国際ボランティア会

発展途上国に絵本を届ける活動

・認定NPO法人キッズドア

日本国内の全ての子どもが夢や希望を持てるよう、社会問題の解決に取り組む活動

2025年の回忌法要早見表

1 周忌	令和 6 年 (2024) 逝去
3 回忌	令和 5 年 (2023) 逝去
7 回忌	平成 31 年 (2019) 逝去
13 回忌	平成 25 年 (2013) 逝去
17 回忌	平成 21 年 (2009) 逝去
23 回忌	平成 15 年 (2003) 逝去
27 回忌	平成 11 年 (1999) 逝去
33 回忌	平成 5 年 (1993) 逝去

※休日は混み合いますので、お早めにご相談下さい。

編集後記

寺報「芳蓮」第五号をご覧頂きありがとうございます。今回の目玉は貞昌院亀野住職との対談です。以前から一方的に知っており、先進的な取り組み、寺院を永續させるためのあり方などを公開されている方で、一度お話を伺いたいと思い連絡したところ快くお引き受け頂きました。亀野住職のお人柄も感じて頂ける記事になったかと思えます。知れば知るほど奥が深いお寺のこと。芳全寺のために何ができるか、引き続き模索して参ります。

荒木玲音